九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遣唐使廃止に對する再吟味

森，克己

https://doi.org/10.15017/2335375

出版情報：史淵. 50, pp.71-82, 1951-12-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

遣唐使廢止に對する再吟味

森　克己

1

從來の學界では、遣唐使廢止の理由としては、菅原道眞の寛平六年九月十四日の奏狀に、[註1]唐朝が內亂のために凋弊したこと、海上の遭難や新羅賊徒の襲擊の危險が多いことが述べられてゐるのを根據として、遣唐使を十數次にわたつて派遣し、唐文化の吸收同化に努めた結果、日本文化が高上の一途を辿つたのに反し、唐の方では內亂のために文化が衰へ、兩者の文化水準の差異が殆どなくなつて來たので、最早や海上の危險を冒し、人命の犧牲を拂つてまでも態々唐より學ぶべきものが最早やなくなつたからであるといふ說が行はれて來た。

確に右の說で指摘するやうに、海外文化の輸入をその主たる目的とする遣唐使の派遣が回數を重ねるに從つて唐の文化が豐富に輸入された結果、日本文化の水準が高められ、模倣の域を脫してかなりの同化が行はれたことは否定出來ない。たとへば學術に於ける假名文字の發明、漢文の日本化、和歌をはじめ國文學の發達、宗敎に於ける神佛混淆思想の成立等がこれである。また學術技藝に於ても或る點では唐の壘を摩するものすらあつた。たとへば遣唐使の中には大寶二年（七〇二）入唐した粟田眞人や養老元年（七一七）入唐した阿倍仲麻呂、天平勝寶四年（七五二）入唐した吉備眞備等の如くその學識唐の學者を驚かしたものもあつた。[註2]また技術の方面では日本の製紙技術が進步したため、唐の玄宗の時代、その宮廷で勅答を書く用紙に日本で出來た黃麻紙が用ひられた。[註3]或はまた唐の蘇鶚の著した杜陽雜編には、日本人飛龍衞士韓志和の物語が載せられてゐる。それによると彼はもと日本の人で、彫刻の技術に長じてをり鸞鶴鵠鵲の類を彫むと、それ

は全く生あるものさながらの出來榮えであつた。しかもその作つた鳥類の腹の中には關捩を備へ付け、これを捻れば三尺位の高度を保つて一二百歩も飛翔するし、また木彫の猫の子を作り自在に鼠や雀を捕へさせたりすることが出來た。彼の妙技は遂に上聞に達し、唐帝は志和を召してその妙技を覽ることになつた。そこで志和は高さ數尺の踏床を刻み、その上に金銀綵繪を施してこれを「見龍床」と名付けた。これをそのままにしておけば龍形が見えず、これを踏めば鱗・鬣・爪・牙すべて現れて來るといふ裝置であつた。この「見龍床」を皇帝に獻じたところ、皇帝はその龍が生き生きとしてゐて躍動するが如く、あまりに眞に迫つてゐて薄氣味が惡いといふのでこれを撤去させてしまつた。そこで志和は更に懷中より方數寸位の相合子一個を取出し、その中から丹砂を塗つた蠅虎子と名付けた玩具を一二百許りも取出し、これを五隊に分つて並べ、宮廷の樂人の奏樂に合せて涼州の舞樂を舞はせた。各虎子は盤上を宛轉し、詞處毎に隱々蠅聲の如く、曲の終りに臨むと累々として退き、その整然たる有樣は全く尊卑の等級があるかのやうであつた。また虎子をして數百歩の距離にある蠅を捕へさせると、鷂が雀を捕へる時の如く、巧みにこれを捕へるのであつた。皇帝はその技術の精妙なことに驚歎し、褒美として雜綵・銀椀を賜はつた。しかし無慾恬淡な志和は宮門を出るや否やその賜品を人に施して去つた。その後一年も過ぎないうちに志和の消息は全く絶えてしまつたといふ、この一篇の物語は極めて怪奇な說話であるが、兎も角もこうした怪奇な物語が唐代の人々の腦裏に刻み込まれてゐたということは日本人が美術工藝方面の技術に於て勝れた天分と手腕をもつてゐたことを裏付けるものである。また同じく杜陽雜編のうちには、大中年間に入唐した日本の王子と唐朝第一の圍棋の名手顧師言との圍棋の手合せのことが見えてゐる。それによると、顧師言ははじめは王子をあなどつてかかつたが、王子の腕前が意外に强く、顧師言は最後の奧の手の鎭神頭の秘術によつて辛うじて勝つことが出來た。そして敗れた日本王子が師言のことを鴻臚に尋ねたところ、鴻臚は僞つて師言は唐朝の第三の名手であると語り、王子をして「小國第一の名人は大國第三の名人にも及ばない」と慨歎させてわづかに唐の大國としての態面を保つことが出來たとい

ふ。こうした一篇の說話を通してみても、日本の諸技術の進步をうかがはせるものがある。

しかしたとへ唐が玄宗の時代を絕頂とし、地方節度使の叛亂等によつて國力が次第に衰えつつあつたとしても、元來中國と日本とではその文化の段階に於ては格段の差異があつたのであり、たとへ十數次の遣唐使派遣によつて唐の文化を吸收し、日本文化の水準が高まつて來たといつても、平安貴族のうちには大陸文明憧憬の思潮は因襲的な打ち消し難い力をもつて流れてゐたのである。殊に大陸文明を攝取して貴族等の生活程度が高まれば高まる程、海外の珍貨を欲する欲望が強くなつて來る。式部大輔兼學士大江維時が日觀集の序に於て、

夫貴遠賤近、是俗人之常情、閒聽掩明、非賢哲之雅操、望靑山而對白浪、何異風流、聞絲竹以賞煙霞、旣同聲色、我朝遙尋漢家之謠詠、不事日域之文章、草藁滋生、塵埃空積、寔可重心咨歎者也。

と慨歎してゐるのは、實にこの遠物崇拜の心理を指したものである。[註4] 平安朝貴族が華美風流な有樣を形容するのに「から國もかくやとぞ見えける」等と敍し、[註5] 容姿の端麗な人を唐人に擬し、[註6] 美女を讃えるにも唐女に擬へる有樣であつた。[註7] ただに服飾・容貌の美を中國に擬へたばかりではなく、藤原通憲が宇治左府賴長の學識を讃へて「閣下才不耻千古、訪于漢朝又少比類、旣超我朝中古先達、其才于我國」といつてゐるやうに、學殖の深さを讃へる場合にも中國の學者を標準としてゐるのである。[註8]

このやうな中國文化に對する憧憬思想はただに遣唐使時代に盛んでもあつたばかりではなく、遣唐使廢絕後外來文化が次第に日本化され、國家意識もこれに伴つて旺んとなつていつた時代に於てさへ、文化の點では到底大陸の壘を摩することが出來ないとする因襲的な思想が貴族社會のうちに根强く流れてゐたのである。[註9] それのみか、唐の文化を攝取して日本文化の水準が高まれば高まる程、海外の文物を欲求する欲望が强まつて來る。といふのは文化が高上すればそれに伴つて貴族社會の生活樣式もまた高められ、生活が高上すればそれに伴つてまた海外の文物に憧れ、舶來品に對する欲求が强く

なつて來るのは當然である。この傾向は遣唐使の派遣が漸く間遠になつて來た頃、禁を犯して我が國に來航した新羅商人の齎した商品に對し、唯單に外來品といふことの魅力だけで、貴族達はその家產を傾けてまでも競ひ買ひ、[註10]渤海の使が來朝すれば、政府に先んじてその齎した物を買取らうとする。[註11]更にまた唐の商人が來航すれば禁令を犯し關を越えてまでもその珍貨を競つて手に入れようとする。[註12]殊に甚だしいのは、渡島の蝦夷が政府に進めた貢物の中から、途中でその優れた皮革類のみを拔き取つてしまふものもあつたといふやうな諸例から推しても、[註13]當時の貴族階級の間に高まつてゐた遠物愛好欲の熾烈さが見られるのである。

今冷靜に遣唐使廢止に關する菅原道眞の上奏文を讀んでみると、その中に所謂大唐の凋弊は、その文化の凋落よりもむしろその內亂による治安の衰退を意味してゐる。しかも道眞がこのやうな上奏文を進めるに至つた動機となつた在唐僧中瓘の太政官へ寄越した書狀も道眞の上奏と同じ寬平六年に太政官に到來したのであるが、その書狀によれば「久しく續いた唐の兵亂も治まつて今は稍ゝ平穩になつた」といつてゐるのであり、これに對し太政官より中瓘に遣した太政官牒では「遣唐使派遣のことは旣に決定してゐるが、連年の天災に準備が整はないから出發を延期してゐるのである」と答へてゐるのである。[註14]結局道眞の上奏文と太政官牒とは共に中瓘の書狀を基として意見を立ててゐるのであり、太政官では朝議によつて遣唐使派遣を決定したのに道眞は遣唐使の廢止を進言してゐるのであり、これは兩者の見解の相違といふべきである。しかもこの太政官より中瓘に與へた官牒は寬平六年七月二十二日附であり、道眞の遣唐使廢止意見の奏狀は同年九月十四日附であり、その間わづかに二ケ月足らずを隔てるのみである。從つてこのわづか二ケ月足らずの間に政府當局者間に急に日本文化の優秀性についての認識と自覺とが湧き起つて來て、一旦朝議で派遣と決定してゐた遣唐使を急に廢止するに至つたとする解釋は、極めて不自然然であるばかりではなく、むしろ不自然を通り越して滑稽である。それよりも先づ考へなければならぬのは、中央集權機構が弛緩して來たために尨大な費用を要する遣唐使の派遣が財政的に困難になつ

て來たといふことである。

註 1 菅家文草「太政官牒在唐僧中瓘報上表狀」
2 續日本紀、寶龜六年十月壬戌條
3 唐李濬、摭異記
4 朝野群載一
5 榮華物語一、すべらぎの上「こがねのみのり」
6 本朝世紀康和元年五月二十八日條
7 今鏡三、すべらぎの下「ないえむ」
8 臺記、天養二年六月七日條
9 拙文「日宋交通と日宋相互認識の發展」（史學雜誌四八ノ七・八）
10 類聚三代格一八、天長八年九月七日條太政官符
11 同上一八、天長五年正月二日太政官符
12 同上一九、天長八年九月七日太政官符
13 同上一〇、延曆二十一年六月二十六日太政官符
14 菅家文草「太政官牒在唐僧中瓘報上表狀」

2

遣唐使は中央集權的國家を背景としてゐたから、それは以前に大陸へ派遣された使節には見られなかつた程の大規模なものであつた。一行の人數はその初期の頃には二百四五十人、中期には五百九十人、末期には六百五十人といふやうに次第に膨脹し、組織もまた整然と整つて來た。船も最初は二艘だつたのであるが、後には四艘の巨船が造られるやうになつて來た。

次に船中の備品には海賊や蠻人の襲擊に備へるために甲冑各一百領を備へてゐる。[註1] 更に航海中の食料は主食として糯が

用ひられたが、一日一人一升の割當であつたから、一行が六百五十人とすれば一日六石五斗を要し、往復の航海に二ケ月かかるものとすれば三百九十石の糒を要することになる。[註2] また遣唐大使には二百兩、副使には百兩乃至百五十兩の砂金が下賜されるのが普通であり、遣唐使が出發する際には

大使	絁	六〇疋	綿 一五〇屯	布 一五〇端
副使	絁	四〇疋	綿 一〇〇屯	布 一〇〇端
判官	絁	一〇疋	綿 六〇屯	布 四〇端
錄事	絁	六疋	綿 四〇屯	布 二〇端
知乘船事・譯語・請益生・主神・醫師・陰陽師・畫師・史生・射手・船師・音聲長	絁	五疋	綿 三〇屯	布 一六端
音聲長	絁	四疋	綿 二〇屯	布 三端

新羅奄美等譯語

卜部

留學生・學問僧・傔從

雜使
音聲生
玉生
鍛生
鑄生
細工生
船匠
柂師

絁 三疋 綿 一五屯 布 八端

傔人
挾杪

絁 二疋 綿 一二屯 布 四端

留學生
學問僧

絁 四〇疋 綿 一〇〇屯 布 八〇端

還學僧 絁 二〇疋 綿 六〇屯 布 四〇端

水手長 絁 一疋 綿 四屯 布 二端

水手綿 絁 四屯 布 二端

を下賜することになつてゐた。[註3] 更に唐帝への贈物も延喜式には

銀大五〇〇兩　水織絁・美濃絁各二〇〇疋　細絁・黃絁各三〇〇疋　黃絲五〇〇絇　細屯綿一〇〇〇屯　別送綵帛二〇〇疋　疊綿二〇〇帖　屯綿二〇〇屯　紵布三〇端　望陀布一〇〇端　木綿一〇〇帖　出火水精一一〇顆　出火鐵一〇具　海石榴油六斗　甘葛汁六斗　金漆四斗

が規定されてゐる。[註4] また遣唐使が唐に着いて長安まで赴くことを許されるのは極く限られた範圍であるから、その他の人數の滯在費には相當の費用が要したことであらう。また留學生達の留學費も送らねばならなかつたし、更に遣唐使の歸朝の際には、時とすると唐政府の送使が隨行して來朝することもあつたから、それに對する接待費にも少からぬ費用を要したであらうことは、大宰府が蓄客儲米として三千八百四十石常備すべき規定であつたことからも、その一端が窺はれる。[註5] 兎も角も一切の費用を總計したら、遣唐使派遣には當時の財政にとつて莫大な經費を要したわけである。一般に遣唐使が任命されてより出發するまでに二三年もの年月を費してゐるのは蓋しその準備が容易でなかつたからであらう。寛平六年七月、太政官が在唐留學僧中瓘に與へた牒狀には「頃年天災頻りに起り、遣唐使派遣のことは決定してをり、出發の準備を整へてはゐるのであるが、この分では或は出發の年月を延期するかも知れない。若し唐朝の大官が我が遣唐使のことを尋ねたならば右の趣を述べよ」といつてゐるのは、この間の事情を物語つてゐる。[註6] 況して承和年間の遣唐使のやうに、二回も海上遭難のために途中で挫折し、三回目にやうやく渡航使命を果すことが出來たといふやうな場合には、その失費もまた非常なものであつたらう。遣唐使の派遣がその前期の頃には約七年半に一回の割、中期には十二年半に一回の割、後期には二十年に一回の割といふやうに、時代が下れば下る程間遠になつてゐるといふのも、結局その派遣費が國庫の大きな負擔となり、財政が次第に破綻していつたため、その負擔に堪へなくなつて來た結果にほかならない。[註7] しかも平安時代初期に於ては、國家財政の困難に處するため諸部門に於て

緊縮政策がとられ、外交部門に於ても延曆十七年渤海國使の來朝に制限を加へ、毎六年一貢とし、この時は渤海王の懇請によつてこの制限を撤廢したが、その後天長元年六月に至つて再び渤海國使來朝に對する制限を復活し、一紀(毎十二年)一貢と規定して、彼等の優遇費節減を計つてゐるのである。[註8] 承和五年の遣唐使が事實上の遣唐使の最後となり、その後五十五年を經て寛永六年に遣唐使派遣のことが企てられ、しかもそれが遣唐大使に任命された菅原道眞の上奏によつて廢止されたといふのも、遣唐使の派遣が財政的に困難になつて來たといふことがその大きな原因であつたに相違ない。そして更に廢止の氣運を促したものに、道眞の奏狀にも見えてゐる海上の遭難や賊徒の恐怖があつた。といふのは、新羅との關係惡化の結果北路を捨てて東支那海を横斷する南路をとらざるを得なくなつてより、遣唐使船は屢ゝ海上に於て遭難し、殊に五島列島より一直線に東支那海を横斷する航路をとるやうになつた後期に入つてからは、殆ど毎回遣唐使船四隻のうちの何隻かが遭難するやうになつた。また新羅との關係が惡化し、その上新羅末期の國内不安の結果、新羅海賊が黄海・東支那海を横行し、遂には九州沿岸をも脅かすやうになつて來た。[註9] 從つて當時文化的生活に馴れて積極的潑剌たる精神を失つてしまつてゐた貴族達は、遣唐使に任命されても、海上の不安を恐れて渡航を忌避し、假病を使ふものさへ現れる有樣であつた。[註10] このやうな貴族達の積極的精神の喪失といふことが、遣唐使廢止論に拍車を加へたであらうことは想像に難くない。[註11]

註
1 續日本後紀承和二年三月丁巳條
2 入唐求法巡禮行記開成四年四月十八日條
3 延喜式三〇、大藏省
4 同 上
5 同上二三、民部下
6 菅家文草「太政官牒在唐僧中瓘報上表狀」

7　拙文「遣唐使と新羅・渤海との關係」（史淵第四十八輯）
8　拙著「日宋貿易の研究」第一編第五章第二節
9　同　上
10　續日本紀寶龜七年閏八月庚寅條・續日本後紀承和五年十二月巳亥・同六年三月丁酉條
11　拙著「日宋貿易の研究」第一編第五章第二節

3

しかし遣唐使制度が廢止への道を急いでゐる間に一方に於ては外來文化の刺激によつて生活樣式が高められ、奢侈に馴れた貴族階級には外來品に對する欲求が强くなつて來た。從つてこのやうな强烈な欲望の前には海上の不安の如きは論ずるに足らない。たとへば貞觀十六年政府は香料購入のため態々伊豫權椽正六位上大神宿禰己井と豊後介正六位下多治眞人安江等を唐に遣し、安江は四年の年月を費し、多くの物貨を携へて歸朝した。[註1] しかもこの大神己井と多治安江の香藥購入の場合、その往復共に唐の商船を利用した事實は、遣唐使廢止と因果的な關係をもつてゐる。

一體中國に於ては、六、七世紀の頃、ペルシ灣よりインダス河口まで南下し、次いでマラバル海岸に達したアラビア商人は、ジヤワ・マレー半島・印度支那等にあつた印度人植民地を奪つて根據地を作り、更に南支の廣州に達し、廣州・泉州に居留地を建設し、唐皇帝より自治を許されて活潑な貿易を行つてゐた。ところがアラビア商人達の活躍によつて廣州や泉州が貿易都市として發達して來ると、やがてそれ等の都市には商業資本が蓄積されるやうになつて來る。そしてそこを基盤とする中國商人達の間にも、アラビア商人の活動に刺激されて次第に海外發展の意欲が旺盛になつて來た。殊にこの氣運に對して拍車を加へたものは、九世紀末に起つた昔巢の叛亂である。スレーマンの旅行記にアブ・ザイト・ハツサンの施した補註によると、黄巢は八七八年廣州を包圍してこれを陷れ、市民の大虐殺を行ひ、その犧牲者の中には十二萬のマホメツト教徒・ユダヤ教徒・キリスト教徒・拜火教徒等があつた。また叛徒は桑の木を伐り倒してしまつたので、海

外特にアラビアへの絹の輸出が杜絶した。彼等はまた廣州に居留するアラビア人の船長・船主に苛酷な稅を課し、貨物を奪ひ、暴行を加へる等あらゆる壓迫を加へたので、海上交通は杜絶し、シラト、オーマンの水先案内者や貿易仲介業者までも打擊を蒙つた。このやうな迫害を蒙つたアラビア人は戰亂を避けるため、一時廣州・泉州の地盤を捨てて、マレー半島に引揚げるに至つた。[註2] この機會に乘じ、アラビア商人に代つて南海貿易に活躍するやうになつたのは中國商人である。[註3] その結果香料その他の南海の物貨が中國に續々輸入され、中國で消費された餘剩は中國の特產品である絹や陶磁器や書籍等と共に、新羅や日本に向けて輸出されるやうになつて來た。

唐商船來航の初見は弘仁十年（八一九）出羽に漂着した唐人張覺濟等の船であるが、これは漂着船であつて來航船ではない。[註4] 明かに貿易を目的に來航した船の初見は承和八年春入唐僧惠蕚が乘つて歸朝した唐人李隣德の船であるが、その前年秋惠蕚が入唐の際便乘した船も前後の模樣から推すと唐商船らしく思はれる。[註5] そしてこの後、唐の滅亡まで六十餘年間の間に唐商船の來航するもの三十數回に上つてゐる。また我が入唐僧侶もこれに便乘するやうになり唐末六十餘年間に日唐間を往來した僧侶の乘つた商船の數は二十餘隻にも達し、その僧侶の數も三十餘人に上つてゐる。ただに僧侶のみではなく貿易を目的とする俗人も唐の商船に乘つて往來するやうになつた。[註6] 殊に遣唐使が廢止された寛平六年の前後には、唐商船の來航盛んなため、これに對し來航制限法規さへ設けられた程である。[註7]

以上のやうに唐の商船の來航が盛んとなり、貴族等の欲求する海外の珍貨がそれによつて續々輸入され、且つまた僧侶達の留學渡航も容易となれば、何も從來の如く尨大な國費を投じ、多くの人命を犧牲にしてまでも遣唐使を派遣する必要がなくなつて來るわけである。かくして遣唐使派遣費の支出困難といふことが遣唐使制度に動脈硬化を齎し、また唐商船の頻繁な來航といふことが遣唐使制度のレーゾンデートルを失はせ、最後に海上の不安による貴族達の積極的精神の喪失といふことがモメントとなつて、遂に遣唐使制度が廢止されるに至つたものであらう。

註

1 三代實錄、貞觀十六年六月十七日條

2 Hasan, A. Z.: "Voyage du Marchand Arabe Sulaymân en Inde et en Chine" pp. 75—78.

3 Hirth-Rockhill.: "Cdan Ju-Kua." p. 17.

4 入唐求法巡禮行記、開成四年正月八日條・日本紀略弘仁十一年四月戊戌條

5 拙文「日宋麗連鎖關係の展開」（史淵四十一輯）

6 拙文「宋期日唐貿易と中世的貿易の萠芽」（日本歷史第十八號）

7 拙著「日宋貿易の研究」第一編第五章第二節

Reexamination on the Abolition of Special Envoy to *T'ang* 唐

By K. Mori

Hitherto many scholars ought the reason for the abolition of Special

Envoy to *T'ang* in the cultural self-conciousness caused by the advancement of Japanese civilization. But it must be rather sought in the following account: as the state finances could not bear the burden of the expense of sending Special Envoy to *T'ang*, this system became more and more paralysed, and frequent visits of the trading ships of *T'ang* brought to naught the 'raison d'être' of this system, and lastly the loss of the active spirit of the nobles fearing of the sea led to the abolition of this system.